

## 模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究

徳 永 隆 治

### Research on The Formation of Consciousness in The Design of Physical Education Classes by Means of Practice Teaching

Ryuji TOKUNAGA

#### 1 研究のねらい

教員養成において「実践的指導力」の育成が求められている。小学校教員の養成課程にあつて、体育科の実践的指導力を養うために何をどのように指導するかが問われる。その追究の一端として、小学校教員をめざす教職課程にある学生が体育授業をどのように捉えているのか、そして、授業を通してどのように変化していくのかを捉えようとした。

2007年度に筆者は学生を対象に①「体育授業を行うにあたって心配に思うこと」<sup>1)</sup>、②「教師活動に関する重要度意識」についての2つの意識調査をした<sup>2)</sup>。

①の調査は18項目にわたる質問に対して「全く心配ない」「あまり心配ない」「どちらともいえない」「やや心配だ」「非常に心配だ」の5段階から選択回答するものである。その結果から学生は「運動の苦手な子どもへの配慮」「一人一人の子どもの把握」「模範を示せない種目の指導」「子どもの運動のつまづきの診断」「運動技能の指導」など、指導法に関わることに心配が強いことがわかった。その結果は、日野ほかの心配事に関する研究報告<sup>3)</sup>や、筆者の過年度の調査結果<sup>4)</sup>を追認するものであった。②の意識調査結果からも同様に学生の体育授業に対する意識は、現職の教員以上に指導法に偏っていることを見出した。学生の体育授業に対する意識として、指導目

---

1) 調査は、木原ほかによる「教育実習における体育の授業に関する意識調査」のなかから「心配に関する調査」の項目に準じて、19項目からなる質問紙を活用した。この調査項目は下記の報告書に示されている。

・平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究）研究成果報告書『実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究』（研究代表者：木原成一郎）2006年3月 p. 240

この調査の内容は、次の研究成果をもとにしている。

・木原成一郎・磯崎尚子・磯崎哲夫「教育実習生の小学校体育科指導の心配に関する事例研究」日本教科教育学会誌 第25巻第4号 2003

2) 徳永隆治「体育授業における教師活動に関する意識 学生と現職教諭の意識から追究する実践的指導力」日本体育学会第58回大会予稿集 2007 p. 334

3) 日野克博・刈谷三郎「体育教師教育プログラムに対する大学生の意識一質問紙調査による教育実習生の意識の実態把握」前掲研究成果報告書『実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究』 p. 119-132

4) 徳永隆治「大学の授業に対する受講生及び卒業生の意識の実態把握」前掲研究成果報告書『実践的力量を形成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究』 p157-170

標・内容に関することより指導方法に関することへの関心が高いという結論に達し、それらの意識は体育科教育法に関わる授業や教育実習、模擬授業などを通して培われるものと考えた。

以上のアンケート調査結果による学生の意識の現状を踏まえながら、教職課程における指導の結果として学生の意識の変容を追ってみたい。特に、教育実習や模擬授業により体育科授業の捉え方や、指導法に関する学生の意識の変化を期待することができるが、本研究は模擬授業を通して学生の意識の焦点とその変容を捉えようとするものである。模擬授業の実施及び観察を通して、学生は体育授業の在り方をどのように考えているのかを捉え、そして、それは模擬授業の継続によって変容するものかどうかについて把握しようとした。

その結果から、体育科における実践的指導力を身に付けるために指導すべき内容を明らかにするとともに、実践的指導力を養うために模擬授業の役割を追究し体育授業に関わる教師教育の在り方を考えるための知見を得ることが期待される。

## 2 研究方法

### (1) 省察カードの分析

本学の開放型小学校教員養成課程の第3年次後期に位置づく「体育科教育法演習」の授業において<sup>5)</sup>、9時間の模擬授業を行った。その模擬授業について毎時間、学生全員が図1の省察カードを記入する（自由記述の内容は、当該授業で最も意識したことを2～3項目取り上げるよう事前に指導した）。カードのなかの自由記述方式による学生の感想を分析することによって主題にせまろうとした。その手順は以下の通りである。

- ① 「体育科教育法演習」の授業として学生による模擬授業を実施し、毎授業終了直後に授業者・児童役の学生共に「模擬授業評価カード」を記入させる。
- ② カードに記述された「自由記述」の内容からキーワードを拾い出し、それを一定の項目に分類する。または、記述内容を一定のキーワードにあてはめて分類する。
- ③ 個々の模擬授業について、カテゴライズされた各項目に該当する内容を取り上げている学生のべ人数を把握する。
- ④ 記述の多い項目が、学生の意識の高さを示しているものと判断し、毎時間の模擬授業に対する学生の意識を捉える。また、模擬授業の経過とともに各項目に対する意識に変化がみられるかどうかを追究する。

なお、模擬授業は、Aグループ（n=36）・Bグループ（n=24）に分かれてそれぞれ9時間実

5) カリキュラム上の「体育科教育法演習」と、その中で実施する模擬授業の位置づけは以下のとおりである。（本学児童教育学科における小学校教員養成課程のうち、体育科教育に関する履修科目で、専門科目及び教育実習のみを記す。）

- ・体育実技 1年前期（15時間：2単位）
- ・体育理論 1年後期（15時間：1単位）
- ・初等体育Ⅰ〔実技〕2年前期（15時間：1単位）
- ・初等体育Ⅱ〔実技〕2年後期（15時間：1単位）
- ・教育実習Ⅰ〔安田小学校〕2年9月（2週間：2単位）
- ・体育科教育法〔講義〕3年前期（15時間：2単位）
- ・教育実習Ⅲ〔出身小学校〕3年10月（2～4週間：2単位）
- ・体育科教育法演習〔演習〕3年後期（15時間：1単位）

施し、省察カードへの記述内容の分析は2グループを別途に行い、事例1・事例2とした。

(2) 模擬授業を取り入れた「体育科教育法演習」の授業過程

体育科教育法演習（15回）の授業は以下の内容で進めた。

- 1 授業予定・グルーピング，体育科授業づくりに関する調査
- 2 体育の授業づくり，指導案の書き方，授業研究の進め方について
- 3 模擬授業① 基本の運動〔器械・器具を使つての運動〕または器械運動
- 4 教育実習に関する調査，模擬授業②～④の予定について
- 5 模擬授業② 基本の運動〔走・跳の運動遊び〕または陸上運動
- 6 模擬授業③ 基本の運動〔器械・器具を使つての運動（運動遊び）〕
- 7 模擬授業④ 器械運動〔マット運動または跳び箱運動〕
- 8 模擬授業②～④についての研究協議，模擬授業⑤～⑨の予定について
- 9 模擬授業⑤ 陸上運動または器械運動
- 10 模擬授業⑥ ゲームまたはボール運動
- 11 模擬授業⑦ 体づくり運動または力試しの運動・用具を操作する運動
- 12 模擬授業⑧ 保健（中学年）
- 13 模擬授業⑨ 保健（高学年）
- 14 模擬授業⑤～⑨についての研究協議，体育科授業づくりについてのまとめ
- 15 定期試験

（本授業開始後，3時間経過の後に4週間の教育実習を履修するため，一部変則的な授業計画になっている。）

(3) 模擬授業の進め方

模擬授業（45分）の実施について，以下の手順で授業計画及び実際の授業を展開する。

- ① 授業づくり（教材研究・指導案の作成・授業の準備）や授業実施のための諸準備は模擬授業担当グループのメンバー全員で取り組む（担当は1授業2～4名）。
- ② 指導案は模擬授業実施の1週間前までに徳永に提出し，指導・助言を受け修正する。
- ③ 仕上がった指導案はクラスの全員分を印刷して，授業実施当日に配布する。
- ④ 1時間の授業は授業者一人で展開し，協力者はアシスタントとして指導の補助や準備等を担う。

(4) 「体育科教育法演習」の授業の進め方

模擬授業を実施する演習の時間（90分）を次のような過程で進める。

- ① 始業とともに出欠を確認した後，授業者または協力者が履修学生全員に授業観察のポイントを説明する。
- ② 始業10分後に模擬授業を開始する。（模擬授業は45分）
- ③ 模擬授業終了後に「模擬授業評価カード」を記入し，続いて全員で授業についての協議を行う。
- ④ 終了後に授業者に「模擬授業評価カード」を提出する。
- ⑤ 体育科教育法演習の授業後，授業者はカードを見て必要に応じてコメントを記入し，指導



### 3 結果と考察

#### (1) 模擬授業に対する感想の分類

「模擬授業評価カード」に記述された感想等を分類し、帰納的手法によって記述の内容を以下の11項目のカテゴリーに仕分けした。但し、授業は指導の目標・内容及び方法が一体化して成立するという観点から「指導目標」をカテゴリーに加えた。

- ① 指導目標に関すること
- ② 学習内容（教材）に関すること（主教材・準備運動・整理運動，運動量など）
- ③ 学習場面における具体的な教師活動（指導者から児童への働きかけ）  
（課題の持たせ方，示範，問いかけ，言葉かけ，指示・説明，児童の活動や発言等の取り上げ，板書，資料配布など）
- ④ 学習過程・学習場面の構成
- ⑤ 児童の活動形態に関すること（学習形態，隊形，個別性など）
- ⑥ 学習環境の設定に関すること（場づくり，BGM，教具など）
- ⑦ 指導者のパフォーマンスに関すること（雰囲気，話し方，表情，服装など）
- ⑧ 児童の人間関係（関わり合い）に関すること
- ⑨ 評価方法・評価規準に関すること
- ⑩ ワークシート
- ⑪ その他（児童の実態把握，安全，授業準備など）

#### (2) 事例1における自由記述内容の分類と考察

Aグループ（ $n=36$ ）の9時間の模擬授業について自由記述の内容を分類し、各カテゴリーに含まれる内容を記述した人数をグラフに表したものが図2-1～図2-9である。（グラフの目盛りは、各項目に該当する内容を記述したのべ人数を示す。）

まず、いずれの模擬授業においても「③教師活動」について記述した学生が多い。その内容を取り上げた者ののべ人数は模擬授業A-3で33名，A-6で28，A-2で27名など，9時間の模擬授業のなかで7時間は「教師活動」に関する内容が最も多くなっている。その大半は，指示の内容や指示の出し方，運動中の言葉かけに関する記述であった。「教師活動」への意識が最も高いA-3は1年生の授業ということで，特に「指示・説明」の仕方に意識が向いたことが推測できる。「教師活動」に関する記述が最も少ないのはA-8で，のべ16名であるが，この授業は保健で指導内容に意識がシフトしたものと考えられる。

「教師活動」を取り上げた記述の内容は「子どもたちが活動を始める前に指示しておくべき。」「ペアでどのようにするのかを明確にして活動させるほうがよい。」「指示の声が良く通っていた。」などの「指示・説明」，または「良い動きをしている子どもに対して賞賛の声かけや、『左が空いているよ』といったシュートにつながる動きを引き出す声かけがよかった。」「『足をあげよう』という声かけをしたら動きが良くなると思う」など、「言葉かけ」に関するものが中心になっている。

A-1～A-4では「教師活動」に続いて「⑥学習環境」に関する記述が多い。その内容は大半が，「場づくり」についてである。「個に応じていろいろな場で練習ができる」「場が効果的であった」など，「場づくり」の手立ての効果を認める記述が多い。特に，A-4では「⑥学習環境」

へ着目した記述者が23名で、その全てが「場づくり」についてであった。この授業は「マット運動で、「開脚前転」のために「坂マット」「マットを細く丸めた場」「跳び箱との組み合わせ」などの場が多様に工夫されていたことが評価されている。肯定的な評価が大半であったが、「マットを重ねた場づくりは、どのような力をつけようとしたのか疑問」「いろいろな場を段階的に設定すると良かったのではないか。」といった、場づくりの意義を問うものや、より良い場づくりへの提案なども見られる。

A-3では「⑪安全等」について10名の記述が見られるが、1年を対象にした「アドベンチャーランドで遊ぼう」という単元で、跳び箱・マット・平均台を使っでの運動遊びの授業であった。その活動内容から「安全」が意識されたのは必然といえる。

A-4以後においても「教師活動」への意識は高く、その中心的な内容は「指示・説明」「言葉かけ」であるが、「示範したことでイメージがしやすくなった。」など「示範」に関する記述や、「問いかけによって自分自身で考えることができるようにしたほうが良かったのではないか。」といった「発問」を取り上げた記述も見られるようになった。

A-5は、跳び箱運動をポイント制によるチーム対抗形式にしてゲーム化して扱ったことにより、その功罪についての記述が多くなっている。「跳び方をポイント化して友達と見合いながら活動することで楽しく活動できた。」「チーム対抗で、苦手意識を持った子どもはプレッシャーになる。」など、教材づくりの工夫に対して多様な感想が寄せられている。

A-6はゲーム領域の授業であり、「タスクゲーム」の後に「ゲーム→作戦タイム→ゲーム」という学習の進め方をしたことにより、「学習過程」への意識が強まっている。

A-7は「体ほぐしの運動」を工夫した授業であったが、内容が少なく活動時間が短くなったために時間配分が問題にされた。その結果、この授業については「教師活動」とともに「内容」「学習過程」に学生の意識が広がっている。

A-8・A-9は保健領域の授業で、授業の様子はそれまでの運動領域の授業とは一変するが、「教師活動」への意識は変わらず高い。A-8の授業では身長の変化を基に「体の発育」につい

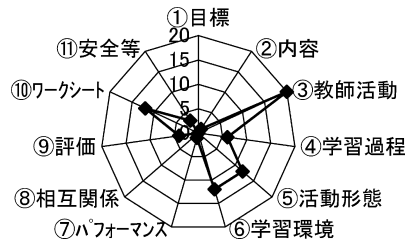


図2-1 模擬授業A-1  
〔4年 跳び箱運動〕

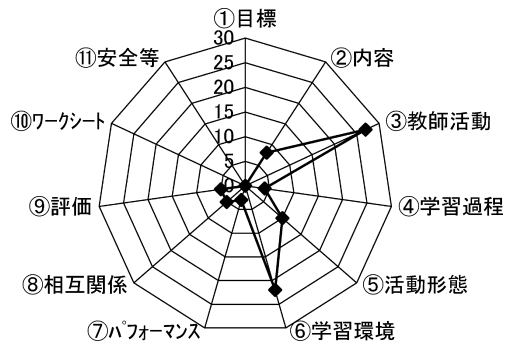


図2-2 模擬授業A-2  
〔2年 走・跳の運動遊び〕

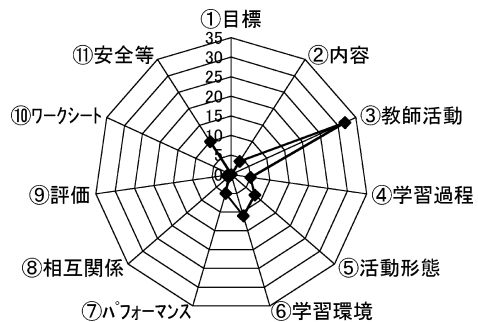


図2-3 模擬授業A-3  
〔1年 器械・器具を使っでの運動遊び〕

て学習を深めようとしたが、内容が単純すぎて本時のねらいに迫りにくい授業に終わった。本時はそのことから「内容」についての記述が増加している。

以上の9時間の模擬授業に対する記述内容の特徴を個々に見ていくと、全体を通して次の点が見えてくる。

○ 前半4時間の模擬授業は、「教師活動」への意識が突出しているほか「場づくり」を中心に

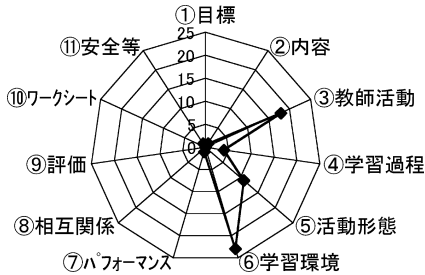


図2-4 模擬授業A-4  
〔4年 マット運動〕

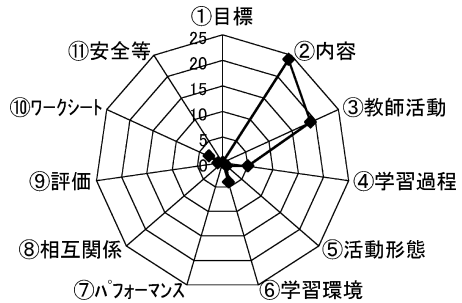


図2-5 模擬授業A-5  
〔4年 跳び箱運動〕

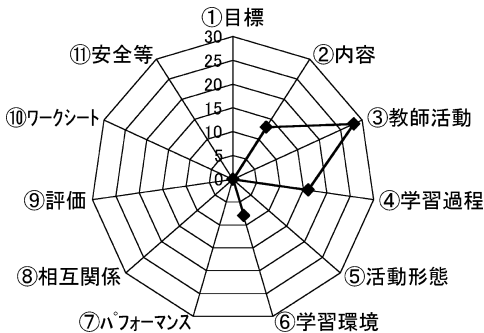


図2-6 模擬授業A-6  
〔3年 ポートボール〕

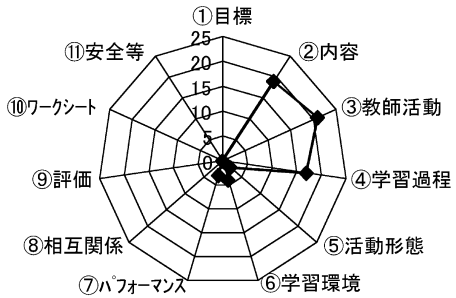


図2-7 模擬授業A-7  
〔5年 体ほぐしの運動〕



図2-8 模擬授業A-8  
〔4年 保健「育ちゆく体とわたし」〕

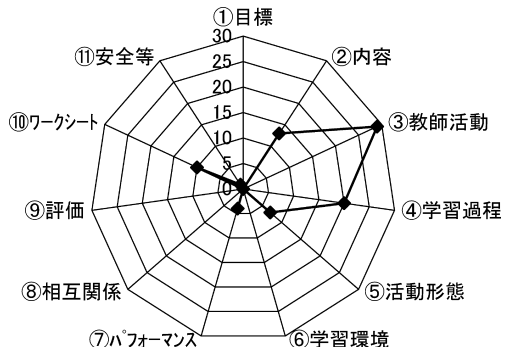


図2-9 模擬授業A-9  
〔5年 保健「ケガの防止」〕

「学習環境」への意識が高い。模擬授業の後半は「教師活動」のほかに「内容」「学習過程・学習場面」に意識が広がっている。

演習第8回目の授業では「模擬授業②～④についての研究協議」を実施した。その「協議と中間まとめ」の視点は、「指導目標」「教材（指導内容）」「場づくり」「学習場面・学習過程」「子ども相互の関わり合い」「教師の言葉かけ」「指示・説明」「学習形態」「評価規準・評価の仕方」「その他」であった。模擬授業第5時以後、「教師活動」中心から「内容」「学習過程・学習場面」に関わる記述に広がりを見せているが、その要因として、「前半の模擬授業に関する協議と中間まとめ」の成果が反映しているのではないかと考えられる。

- 模擬授業第3時の1年「器械・器具を使っでの運動遊び」では全模擬授業のうち唯一、「安全」が多く多くの学生に問題にされている。第1時の4年「跳び箱運動」、第2時の2年「走・跳の運動遊び」、第4時の4年「マット運動」においては「場づくり」に関する記述が多い。模擬授業で取り上げる内容との関連で意識焦点は変化すると考えられる。
- 「内容」「教師活動」「学習過程」への意識が高いという点では、運動領域と保健領域による意識焦点の違いは特にみられない。が、保健授業では、「ワークシート」へ意識が向けられている点特徴的である。指導内容によって授業を見る視点が変わることを物語っている。
- 各模擬授業の指導目標については指導案作成の段階で指導・助言を加えており、実際の授業においては本時目標に迫っていくための指導内容・指導方法に学生の意識が向けられた。従って、評価カードの記述に「目標」に関する内容はみられない。

### (3) 事例2における自由記述内容の分類と考察

Bグループ（n=24）の9時間の模擬授業についての自由記述の内容を分類し、各カテゴリーに含まれる内容を記述したのべ人数をグラフに表したものが以下の図3-1～図3-9である。（グラフの目盛りは、各項目に該当する内容を記述したのべ人数を示す。）

模擬授業9時間中、B-7・B-8以外の7時間は、「教師活動」について記述した者ののべ人数が多い。特にB-1・B-2では「指示・説明」「言葉かけ」のほかに「示範」「課題の持たせ方」について重ねて「教師活動」の内容を取り上げている者が多く、「教師活動」に関して記述した者の人数が突出している。B-7・B-8の2時間については、指導内容に意識が集中している。9時間の模擬授業において、7時間までが「教師活動」に最も多くの目が向けられている

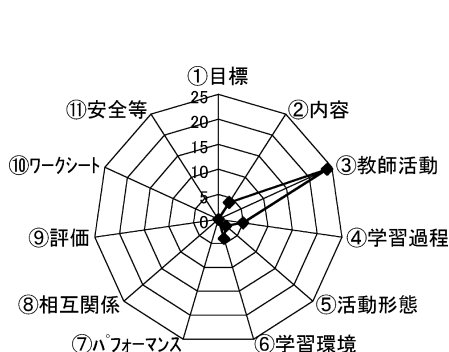


図3-1 模擬授業B-1  
〔1年 器械・器具を使っでの運動遊び〕

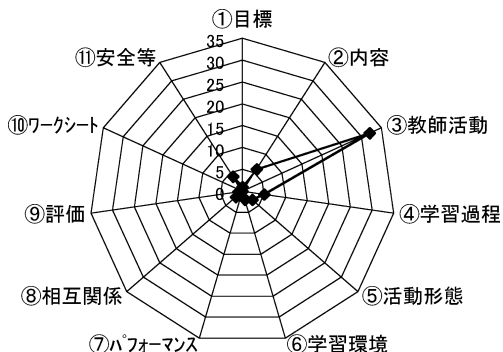


図3-2 模擬授業B-2  
〔2年 鉄棒遊び〕



るという点は、Aグループの場合と同様である。これは、模擬授業実施前に履修する「体育科教育法」での理論学習や、教育実習での授業参観等が反映しているのではないかと考えられる。

模擬授業を開始して第1時・第2時は「教師活動」に意識が突出しているが、その後、模擬授業の進行に応じて「内容」「学習過程・学習場面」「学習環境」への意識の広がりが見られ、この傾向もAグループの場合と同様である。

B-3は2年「かけっこ・リレー遊び」の授業で、教材の問題とともに準備運動の在り方が問題にされ、「教師活動」と同等に「内容」への意識が高まっている。

B-5の5年「走り幅跳び」の授業では「学習環境」に関する記述が多数見られるが、その内容は「子どもがつまずくだろうと思われるポイントを考えて場づくりをしていた。」「自己課題にあった練習の場が選択できた。」など、全てが「場づくり」に着目したものである。



図3-3 模擬授業B-3  
〔2年 走・跳の運動遊び〕

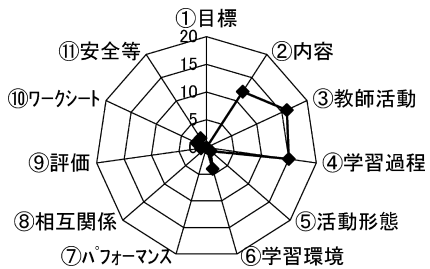


図3-4 模擬授業B-4  
〔6年 マット運動〕

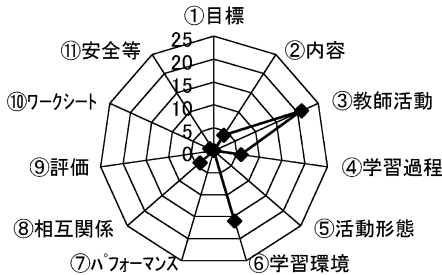


図3-5 模擬授業B-5  
〔5年 走り幅跳び〕



図3-6 模擬授業B-6  
〔3年 ボートボール〕



図3-7 模擬授業B-7  
〔3年 用具を操作する運動〕

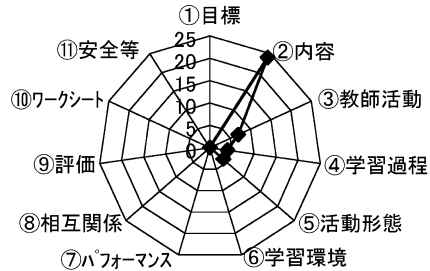


図3-8 模擬授業B-8  
〔3年 保健「毎日の生活と健康」〕

B-6は「ポートボール」で作戦やルール工夫をねらいとした授業であったが、「自分の役割が決まっていたので、どう動けばよいか分かりやすかった。」「しっかりと一人一人がどのような役割を果たせばよいかを考えることができた。」など、内容の取り上げ方に着目した記述や、「ゲームをして、もう一度反省をたててゲームをするという流れがよかった」などの「学習過程」に関する記述が増えている。

B-7は3年「用具を操作する運動」で新聞紙を使った各種運動が工夫され、新鮮な内容に肯定的な反応が多く、全員が「内容」について取り上げている。

B-8は3年保健「毎日の生活と健康」の内容として手洗いの実験を取り入れた授業であったが、活動と学習内容とがかみ合い理解しやすい内容であった反面、1時間の学習内容として物足りなさが問題にされるなど、「内容」への意識が高くなっている。

B-9は6年の保健「病原体と病気」の授業では、くしゃみの飛散状況を見えやすくした教具が工夫されており、その手立てに着目して「学習環境」に関する記述が増えている。

以上、BグループにおいてもAグループの場合と同様に、模擬授業の内容と学生の意識焦点との関連性が高いことが認められる。

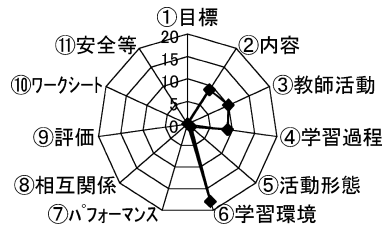


図3-9 模擬授業B-9  
〔6年 保健「病気の予防」〕

#### 4 結 論

2つのグループによる演習での模擬授業を通して、体育授業に対する学生の意識とその変容を事例的に捉えた結果、以下の点が明らかになった。

- 11項目に分類した模擬授業に対する意識のカテゴリーのうち「内容（教材）」「教師活動」「学習過程」「学習環境」に関する記述が多く、それらに意識が高いことが認められ、学生の意識は具体的な指導方法に関わるものが主であることが事例的に明らかになった。

特に、「教師の言葉かけ」や「指示・説明」の内容・方法、「示範」の仕方などを中心とした「教師活動」に対する意識は、指導内容に関わらず毎時間高い傾向にあった。

- 「教師活動」以外の「学習過程」「学習環境」等の指導法に関する意識の置き方は、模擬授業の内容によって異なっており、意識の焦点は指導内容との関連が強いと考えられる。中でも「学習環境」の中心的な項目をなしている「場づくり」については、器械運動系・陸上運動系の内容との関連が強い。従って、体育授業に対する多角的な意識を養うためには、模擬授業で取り上げる内容（教材）の多様化が必要といえる。
- 模擬授業の経過とともに、意識が「教師活動」中心から他の項目へと広がりを見せていることから、模擬授業を通して体育授業の見方・考え方が深まってきたと考えられる。この結果から実践的指導力の養成において、模擬授業は一定時間数以上の継続的な実施が必要といえる。
- 「体育授業における教師活動の重要度意識」の調査（2007、徳永）の結果では「場づくり」「学習過程」と共に「子ども相互のかかわり合いづくり」への学生の意識が高かったが、模擬授業においては全時間、子どもの相互関係への意識は高くない。それは学生が児童役をこなしていることによるのではないか。その点で、実際の子どもの指導とは異なる模擬授業の限界が見られる。実際の授業では不可欠な子どもの相互関係の指導について、模擬授業に課題が残る。

## 5 終わりに

事例的研究の結果として前記の結論に達したが、学生が自由記述した内容をカテゴリーに分類する作業を筆者一人で行ったことにより、分類の妥当性が問われる。その点で研究方法に課題を認めざるを得ないが、今後さらに模擬授業や教育実習などの授業実践をとおして学生の体育授業に対する意識を捉え、実践的指導力を養うための体育科教育の内容・方法を明らかにしていく実践的な研究の集積が重要ではないかと考えている。

模擬授業のねらいは、体育授業づくりの考え方や具体的指導法を体験的に学ぶことにあるが、模擬授業として良い授業ができるか否かより、学生自身が体育授業づくりのための課題を見出すことが重要と考える。授業づくりにおいて多角的に課題意識が持てるよう、模擬授業を軸にした演習の在り方を引き続き追究していきたい。

〔追記〕

- 本研究は、平成18・19・20年度日本学術振興会科学研究費補助金：基盤研究（B）「『実践的指導力』を育成する体育教師教育プログラム開発のための実証的研究」（課題番号18300204，研究代表者：木原成一郎）の補助を受けて進めたものである。
- 本論文は日本体育学会第59回大会（2008年9月）の一般発表で口頭発表した内容をもとにまとめた。

## 要 旨

演習で実施の模擬授業を通して体育授業に対する学生の意識とその変容を事例的に捉えることによって、教職課程にある学生に体育授業の実践的指導力を身に付けるための指導内容を明らかにするとともに、模擬授業の役割を追究しようとした。

研究方法としては模擬授業の実施及び観察を通して授業後に記入する省察カードの自由記述内容を分類し、学生の意識を捉えるとともに、模擬授業の継続によってその変容を把握した。

その結果、学生の意識は「内容（教材）」及び「教師活動」「学習過程」「学習環境」を主とした具体的な指導方法に強く向けられている。特に、「教師の言葉かけ」や「指示・説明」の内容・方法、「示範」の仕方などを中心とした「教師活動」に対する意識が高いことが明らかになった。「学習過程」「学習環境」等の「教師活動」以外についての意識は指導内容との関連が強く、中でも「学習環境」の中心となる「場づくり」については、器械運動系・陸上運動系の指導との関連が強いことが認められた。また、模擬授業実施の経過とともに「教師活動」中心から他の項目へと意識の広がりを見せていることがわかった。

このことから、体育授業に関わる意識を広げていくためには多様な内容を取り上げて模擬授業を経験するとともに、一定時間数以上の継続的な模擬授業の実施が必要という結論に達した。

一方、実際の授業では不可欠な子どもの相互関係の指導について、模擬授業では意識が向けられておらず、模擬授業をとおして実践的指導力の養成に課題がみられた。

〔2008. 9. 29 受理〕